



雪に覆われた荘厳な西チベットの夜、標高6000メートル以上を誇る聖山カイラスは月明かりに照らされ、まるで光を放つかのように暗闇に浮かび上がっていた。

チベット暦の4月に当たる時期に積んだ功德は何万倍にもなるとされ、多くのチベット人たちが最高聖地であるカイラスを目指す。特に釈迦の誕生・成道・入滅を祝うサカダワ祭が開かれる満月の日は、いつもは静かな辺境の地がにぎやかな活気に包まれる。

祭りは早朝から始まった。連日降り続いた雪もびたりと止み、どこに潜んでいたのか、数え切れないほどの巡礼者が姿を現した。人々が向かう先は、カイラスの西側に位置するタルボチエ。ここにタルチョ（祈祷旗）が掲げられた高さ13メートルの大きな柱が立っている。

年に一度の祭りの日、この柱をいったん倒しタルチョを新しいものに取り替え、再び立て直す。柱は真つすぐ天に向かって立てば縁起が良いとされ、巡礼者たちはロープで慎重に柱を起こしていく。

数時間後、人々の願いを掲げた色とりどりのタルチョが、雄大なカイラス山を背にはためいていた。次のサカダワ祭を迎えるまでの一年間、人々の祈りが込められたタルチョはこの聖なる地で風に吹かれ続ける。

春

夏

秋

冬

31

4月 サカダワ祭

タルチョに 込められた祈り



文・写真=松尾 純

写真家。広島出身。50以上の国と地域での撮影経験を持ち、チベット文化圏を最も得意なフィールドとする。5,000mを超えるヒマラヤ山脈など、世界各地の辺境で暮らす人々をテーマに撮影を続ける。http://junmatsuo.jp